

國學院大學學術情報リポジトリ

The Newly Discovered Copy of Nippo Jisho
(Vocabulario da Lingoa de Iapam, 1603) in the
Biblioteca Nacional of Brazil

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shirai, Jun, Tashiro Perez, Eliza Atsuko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000467 |

〔資料紹介〕

新出キリシタン版・リオ本 『日葡辞書』について

白井 純／タシロ・エリザ

1. リオ本の発見

2018年9月、ブラジルのリオデジャネイロにある国立図書館（Biblioteca Nacional）において、現存4冊目となるリオ本『日葡辞書』（Vocabvlario da Lingoa de Iapam）の存在を確認した（図1）。

『日葡辞書』の既知の3冊はオックスフォード大学ボードレー図書館、パリ国立図書館、エボラ公共図書館が所蔵している。この他にマニラ本といわれるドミ

ニコ会古文書館旧蔵本の存在が知られるが、豊島編（2013）の「イエズス会刊行キリシタン版一覧」に見るとおり、現在は行方不明となっている（上智大学キリシタン文庫に写真が所蔵されており閲覧できる）。

リオ本はサンパウロ大学准教授のエリザ・アツコ・タシロ・ペレス（Eliza Atsuko Tashiro Perez）と信州大学准教授の白井純による合同調査により、同図書館の貴重書コレクションに見出したものだが、キーワードを用いた前方一致検索が可能な館内オンライン検索端末の書誌情報調査による成果である。過去に同図書館で関係書の調査が行われたとも聞いているが、リオ本が近年になって新た



図1 リオ本『日葡辞書』
Fundação Biblioteca Nacional所蔵

にデータベースに登録されたため今回の発見に至ったと思われる。館内検索端末での詳しい書誌情報にはその登録年月日(2001年9月17日)と思われる日付を含むデータ“20010917092028.6”が掲載されており、更にオンラインの一般検索では“Projeto Especial (2001)”と記入があることも確認できるので、2001年にこれらの情報がオンラインカタログに公開されたと推測する。

リオ本が同図書館に所蔵されるに至った経緯については、本報告の3節「ブラジル国立図書館及び D. Teresa Cristina Maria コレクション」に詳しく述べるが、貼付された“D. Thereza Christina Maria”と印刷のある蔵書票(エクスリプリス)



図2 エクスリプリス
Coll. D. Thereza Christina Maria

リス(図2)が示すように、ブラジル皇帝ペドロ2世の皇后、ナポリ出身のテレザ・クリスティナ・マリア(Teresa Cristina Maria de Bourbon-Duas Sicilias)(1822-1889)のコレクションの一部である。

2. リオ本の概要

リオ本『日葡辞書』は同図書館の貴重書(Livros Raros)の一冊であり、請求番号は205.002.022(閲覧時)である。

大きさは表紙24.5×16.9cm、洋紙遊び紙2紙が各23.0×16.3cm、扉22.9×16.0(匡廓19.5×13.9cm、中央ビニエツト7.5×6.6cm)、1ページ目22.9×16.0cm(匡廓19.9×13.7cm)、後ろ洋紙遊び紙2紙が各23.0×16.6cmである。表紙は茶色木目の厚紙に金で縁取り箔押ししている。表紙見返しの縁は表紙と同じ材質に金で縁取り、中央は白い布(ビニール?)張りで波目状の文様がある(図3)。背表紙は脱落して紛失しており、背の中央には欧文小型活字の補強紙が見えている。補修を受けたが再び破損したということだろう。天・地・小口は赤色で着色されている。



図3 表紙見返し

表紙見返し中央に“BIBLIOTHECA NACIONAL DO RIO DE JANEIRO / IV 34.8.24”と記載、印刷のある蔵書票（図4）が貼付される。この蔵書票のデザインはブラジル在のイタリア人デザイナーである Eliseu Visconti (1866-1944) の作だという。

背表紙上部に“IV 34 8 24”の書き込みがあり、背表紙下部に“IV 34 / 8. 24”と記載のある蔵書票が貼付されている。これらの数字は旧番号だろう。遊び紙1枚目ウラ左上に“425.6.39 / Coll. / D. Thereza Christina Maria / 33-35” / 42(?)78-98”と記載、印刷のある蔵書票（図2）が貼付され、“425.6.39”



図4 表紙見返しの蔵書票

は抹消されている。遊び紙2枚目オモテ中央には“205.2.22”の鉛筆書きがあり、閲覧時の請求番号に相当する。また、扉のタイトル左に“1938 / 1603 / — / 335”の筆算が鉛筆で記入されており、1938年に本書刊行年との比較計算を行ったと思しい。

全体的に虫損がみられ、とくに表紙と裏表紙に近い部分に激しく、一部は補修後の被害とみられる。また、背がないためにH紙とI紙の間で本が切断し、Ii2とIi3は用紙が外れてしまっている。損傷が大きいため本格的な補修が必要だが、現状ではそれ故に用紙と綴じ込みの様子が観察し易い。

用紙は基本的に雁皮紙で、ラテンアルファベット活字を用いる他のキリシタン版と同様である。用紙には所々大きな繊維片がみられ、この繊維は雁皮なのか楮なのか判断できない。用紙の厚さはまちまちで一定しない。この点も雁皮紙を用いる他のキリシタン版と同様だが、白井が前年に調査したライデン本『羅葡日辞書』の用紙よりは品質が良く裏写りは少ない。

既存の『日葡辞書』には、允許状 (Aprovação) と認可状 (Licença) の有無、補遺 (Supplemento) の有無に相違があることが知られており、これらを持つのがポードレー本とエボラ本、持たないのがパリ本だが、リオ本はこれらを欠いており、その点ではパリ本に一致する。

221丁から224丁 (Kkk紙) と217丁から220丁 (Iii紙) の綴じが逆になっているが、これを除けば完本である。パリ本は90-91丁、110-111丁、158-159丁、222-223丁、234丁-235丁、286丁-287丁、310丁-311丁を欠損しているが、リオ本にはすべて揃っている。丁数表示にみられる誤植は共通する。

今後、石塚 (1976) がパリ本複製に付した解題を参考に諸本の校合を行い、リオ本の詳細な特徴を明らかにしたいと考えている。

3. ブラジル国立図書館と D. Teresa Cristina Maria コレクション

ブラジル、リオデジャネイロ市所在の Biblioteca Nacional (国立図書館) (図5) の形成は、ポルトガル国の王位にアヴィス王朝ジョアン1世 (1385-1433在位) が即位したヨーロッパ中世末期に遡る。



図5 Biblioteca Nacional (国立図書館) 外観 (在リオ)

ポルトガルからブラジルに移動された Real Biblioteca (王室図書館) について詳しい Schwarcz (2002) によると、王子王女の教育のために設けたことがその始まりで、次の国王ヴァルテ1世 (1433-1438) はポルトガル王国の歴史書を優先的に収集し、アフォンソ5世 (1438-1481) (この国王は圖書の輸入・流通税を免除したことで知られる) の代に、その施設は初めて学者が利用できるようになった。

次期国王ジョアン2世 (1481-1495) の時代にはアヴィス王朝に関する文献が収蔵されるようになり、王室図書館として威信を固めていった。1580-1640年のスペイン・ハプスブルク家同君連合時代には多くの書籍が紛失し、略奪されたが、次期ブラガンサ王朝のジョアン5世 (1706-1750) に最盛期を迎え、ヴァチカンやフランス王立図書館に匹敵するほどの規模になっていた。が、その直後、1755年にリスボン地震が起こり、その火災によりほとんどが亡失してしまう。

「改革王」と呼ばれたジョゼ1世 (1714-1777) とその宰相ポンバル侯爵 (1699-1782) の奮励により再び図書館の形成が始められた。図書館はポルトガル王室、特にジョゼ1世の威信の象徴だけでなく、ポンバル侯爵の権威をも表すものであった。宰相ポンバルは、書店、古書店、個人収集家から書籍を買い集めさせ、更に1759年にポルトガルおよびその植民地から追放を命じたイエズス会所蔵の書籍を奪いつつ、Real Biblioteca (王室図書館) を構想してその建造・形成のため活動した。と同時に、市民利用のための Real Biblioteca Pública da Corte (国王宮廷公立図書館、後にポルトガル国立図書館) の建設も着々と進めていくが、こちらは次期女王マリア1世 (1777-1816) の治世、1797年に公開されることになった。マリア1世はポンバル侯爵と敵対していたので、そのポンバル政権の繁栄のシンボルになっていた Real Biblioteca を軽視し、後者の公立図書館の方を重んじたのである。

ナポレオンの大陸封鎖令に従わなかったポルトガル王室は、フランス軍がリス

ボンを侵攻した1807年11月30日の前日に、約1万人を率いてブラジルに避難し、リオデジャネイロ市に遷都を行った。1792年から摂政を務めていたジョアン王子は、この時、Real Bibliotecaを丸ごと輸送することを命じるが、それは王室の移動とは同時ではなく、3回に渡って行われる予定になり、実際に1808年と1810年に搬送があった。最後の荷物はリスボン港を出なかった。リオに着いた書物は第3カルメル会病院の室内に収められたが、1810年10月29日付の勅令により同病院の地下室に移動され、これが王立図書館のリオ設立の日とされている。

1822年にブラジルがポルトガルに対して独立宣言を行うと、ポルトガルが賠償金を請求するが、そのうちの約12.5%が図書館の値であった。その賠償金を整理し、独立国として世界に認められるために英国から融資を受けるが、これがブラジルの対外債務の起源だと言われている。独立を遂げたばかりの国には高額すぎる図書館だったわけである。

共和制の考えが徐々に浸透していた1858年に、現在ではリオデジャネイロ連邦大学の音楽学校があるパセイオ街の建物に移り、1910年に現在のリオブランコ街の建造物に収められた。これは当時の最新の技術を使用した、ネオクラシックとアールヌーヴォーの折衷建築物である。ブラジルの独立直後にBiblioteca Imperial e Pública（皇帝公立図書館）に改名、1876年にBiblioteca Nacional do Rio de Janeiro（リオデジャネイロ国立図書館）、遂に1946年に名称はBiblioteca Nacionalに定着した。1990年に、Euclides da Cunha図書館、Instituto Nacional do Livro及びBiblioteca Demonstrativa de Brasíliaと合併、Fundação Biblioteca Nacionalの傘下になる。

ポルトガルの王室図書館時代から、書店からの購入や納本制度の利用だけでなく、個人の寄贈が大きく蔵書増大に貢献している。国立図書館の年報（1897）によると、リスボン地震直後の1770年に、聖職者でありながら作家・歴史家でもあったDiogo Barbosa Machado（1682-1772）は、王室図書館の再建に尽力していたジョゼ1世のために自身の図書を寄贈したが、それは書籍だけで5,764冊にまで及んだという。リオデジャネイロで正式に再び開館した王室図書館の書籍数は、1814年にLuiz Gonçalves dos Santos神父（1767-1744）が書いた著書によると、60,000冊を超えていたという。その後も図書館の蔵書は徐々に増え、例えば、1822年にポルトガル王室の外交官として活躍したConde da BarcaことAntonio de Azevedo de Araujo（1754-1817）の書籍6,328冊の購入が記録されている。長くポルトガルに住んでいたリオ出身の読書家João Antonio Marquesも、1889年、1890年に自身の図書6,309冊を、死亡後も約160冊の書籍を寄贈した。

しかしいずれも、ブラジル皇帝ペドロ2世の、書籍だけで48,236冊にのぼる寄贈には及ばない。これは、ブラジル共和国宣言直後、ヨーロッパに追放されたペドロ2世が、皇室図書館の書籍および皇室博物館の品々を、亡き皇后の名をブラジルに残すためにテレザ・クリティナ・マリア文庫として所蔵することを義務付

けて、寄贈したものの大部分である。その一部は、Cunha (1987) によれば、Instituto Histórico e Geográfico do Brasil (ブラジル歴史地理学院) と Museu Nacional (国立博物館)、更に Jardim Botânico (植物公園)、Escola de Belas Artes (美術学校) の図書館にも分け贈られた。

発見された『日葡辞書』に貼り付けられている蔵書票 (エクスリプリス) の Thereza Christina Maria とは、ポルトガル語の旧綴りであり、現在では Teresa Cristina Maria と書かれる。イタリア半島南部の、両シチリア王国フランチェスコ 1 世 (1777-1830) の姫で、ペドロ 2 世とは代理結婚式で結ばれ、1843年にリオに到着、ブラジル帝国の 3 人目の皇后になる。Avella (2010) によると、ブラジル歴史においては長い間、テレザ皇后は愛情に満ち、慈悲が深く、従順なだけの、存在感の薄い不美人な女性として語られていた。「哲学者王」のペドロ 2 世に対してテレザ皇后は「国民の母」である。しかし、皇后は当時、学術的、文化的に大きく発展を遂げていたナポリ生まれである。更に、シチリア王国を支配していたのは、テレザ皇后もその子孫であるブルボン王朝で、この家はポンペイ、エルコラーノ遺跡の発掘に力を入れたことでも有名である。

リオ本『日葡辞書』が日本からブラジルのリオデジャネイロに渡った経緯をたどるに当たって、ペドロ 2 世の交友関係はもちろんのこと、テレザ・クリスティーナ皇后の生い立ちと生涯も無視できないだろう。

4. リオ本の意義

リオ本『日葡辞書』の意義は、残存点数が少ないキリシタン版の主要文献であるというだけでなく、中南米大陸で初めて、日本のキリシタン版が発見された事実にある。

イエズス会が企画した天正遣欧使節が持ち帰った西洋の金属活字印刷機によって、16世紀末から17世紀初頭の日本で刊行されたキリシタン版が、遙かな距離を移動し、文化や学術を愛する人々の手を経てブラジルの図書館に収まり、今日まで大切に保管されるためには、いくつもの偶然の積み重ねがあったに違いない。日本語にポルトガル語で注釈を付した辞書は、日本語学とポルトガル語学にとって第一級の言語資料というだけでなく、文学や歴史学の重要資料として知られているが、イエズス会宣教師の主要な出身地であるポルトガルを旧宗主国とし、日本人移住の伝統を持つブラジルにとっても特別な意味があるだろう。

リオ本がどのような経緯によりリオデジャネイロに到達したのか、その謎を明らかにすることは、関連する文献の移動と残存の状況を明らかにすることでもある。リオ本が特異な存在である可能性もあるが、他のキリシタン版がブラジルに到達し、どこかの図書館・博物館あるいは個人蔵書家のコレクションとして存在する可能性も否定できない。今回の調査でも、リオ国立図書館がキリシタン版と

同時期に流通した西洋の辞書や文法書を相当数所蔵することを確認した。こうした文献がキリシタン版の形成に深く関わったことは現代のキリシタン語学研究的常識となっているが、類書のなかにキリシタン版が紛れ込んでいることを期待してもおかしくはないだろう。

リオ国立図書館の蔵書は言うまでも無く、ブラジルをはじめとする中南米諸国とその旧宗主国の歴史、イエズス会の活動、図書館・博物館の設立とコレクションの形成過程など、今後明らかにすべき課題は多い。

謝辞

国立図書館 (Biblioteca Nacional) 貴重書室での原本の閲覧と調査に数々の特別な便宜を図っていただいたダニエラ・シマス (Daniela Simas) 氏に感謝すると共に、書誌情報のオンライン登録という継続的活動を行ってきた同図書館の見識に敬意を表したい。

リオ本『日葡辞書』の発見に至る調査が可能になったのは、サンパウロ大学大学院日本語・文学・文化研究科に白井が客員教員として招聘を受け、2018年8月から10月の期間、ブラジルに滞在したことによる。同研究科では日本研究の充実を図るため、毎年日本の専門家が講義を担当することになっているが、2018年度の講義は、日本の言語学史研究の一環としてキリシタン語学の位置を確固たる分野にすることを意図していた。このような事業のため、同研究科では国際交流基金の助成を受けている。すべての関係機関・関係者に感謝申し上げる。

本研究は、JSPS 科研費17H02341、18K00608による成果の一部である。

参考文献

- 石塚晴通解題 (1976) 『バリ本 日葡辞書』 勉誠社
大塚光信解説 (1998) 『エヴォラ本 日葡辞書』 清文堂
亀井孝解題 (1973) 『日葡辞書』 勉誠社
豊島正之編 (2013) 『キリシタンと出版』 八木書店
Schwarcz, Lilia M. (2002). *A longa viagem da biblioteca dos reis – Do terremoto de Lisboa à independência do Brasil*. Companhia das Letras.
Anonymous (1897) Resumo Histórico. In *Annaes da Bibliotheca Nacional do Rio de Janeiro*. V. XIX. Rio de Janeiro/Brasil, p. 219-242.
Cunha, Lygia da F.F. de. A (1987) “Collecção D. Thereza Christina Maria”. In *Fotografia: “Collecção Thereza Christina Maria”*. Biblioteca Nacional, p. 9-18.
Avella, Aniello Angelo (2010). “Tereza Cristina Maria de Bourbon, uma imperatriz silenciada”. In *Anais do XX Encontro Regional de História: História e liberdade*. ANPUH/SP.